地域資源の発見，そして守り育てる風景づくり
：船橋小径の会による風景資産の価値向上

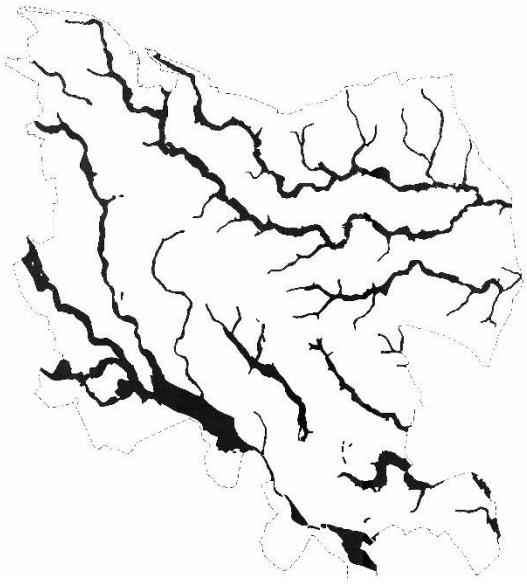
Discovery of local resource and landscape conservation
: Evaluation improvement of landscape properties by community resident society
'Funabashi Komichi'

西川美枝子（船橋小径の会）
入江　彰昭（東京農業大学）

１．はじめに

本活動地域の世田谷区の緑被率は 23.6%で､そのうち樹木地率は 17.4%で区内緑被全体の 7 割にあたります（平成 28 年度現在)。世田谷が都市化する以前の明治 42（1909）年の樹林地率は 23.3%で、その樹木地分布図（図表１）をみると連続した形態と塊状に分散したパッチワーク形態を認識できます。これらを地形図と照らし合わせると、連続形態は国分寺崖線の緑や谷戸の斜面林で、塊状形態は武蔵野台地上の畑地内にある屋敷林であることがわかります。明治 42（1909）年の水田率は 12.5%で、その水田分布図（図表２）によると世田谷の水系は、北西から南東方向へ流れる水系が３つあり、多摩川水系の丸子川（旧六郷用水)、清水川、野川、入間川、仙川、谷戸川、谷川、谷沢川。呑川水系の呑川、九品仏川。目黒川水系の蛇崩川、烏山川（旧烏山用水)、北沢川（旧北沢用水)、目黒川。これらの小さな川が水田を潤し、川に沿って水田が形成されていたことがうかがえます。都市化される以前の世田谷の原風景には、台地上の畑地と屋敷林が点在する中に崖線や谷戸の斜面林と水田が織り成す多くの里地里山の風景がみられました。今なお、区内のあちこちでこれらの武蔵野の面影を残す原風景を見ることができ、都市再生が進む中でこれらの資源の発見とその再生が待たれます。

図表１　明治 42(1909)年の樹木地分布図
（出典：世田谷風景図集 1986 年）



図表２　明治 42(1909)年の水田分布図
（出典：世田谷風景図集 1986 年）

２．地域資源の発見，そして守り育てる風景づくり： 船橋小径の会

世田谷区では区民が大切にしたい風景を守り、育て、つくることを目的として 2002（平成 14）年より世田谷区風景づくり条例に基づく「世田谷区地域風景資産」を選定しています。これまで選定された 86 箇所の世田谷区地域風景資産を巡ってみますと、鎮守や農家の屋敷林の杜、雑木林、農の風景などの世田谷の原風景が数多く発見されています。

「船橋小径の会」は 2003 年 1 月、活動を開始しました。活動目的は会の立ち上げメンバーの住まい近くにある土の道を残したいというシンプルな願いです。

戦後も田んぼが残り蛍も飛び交っていたという千歳船橋は町の真ん中を烏山川が貫き台地の畑と谷戸の湧水と田んぼという世田谷の原風景の典型でしたが、2000 年を迎える頃には宅地化が進み、わずかに残っていた竹林、雑木林、空き地などが姿を消し、高層マンションが目立ちはじめ、町の様相は大きく変わってきていました。そのような町の中に懐かしい植物、木々、それを求めてやって来る生きものたちに出会える約 300mの土のままの散歩道がありました。私たちは、この散歩道を土のまま残したいという願いの達成に向けて 2002 年に第 1 回世田谷区地域風景資産に推薦し「季節の野草に出会う小径」(以下小径)として選定を受けることができました。

図表３　小径のイメージ

写真１
活動当初の小径入口部の様子（2004 年）

選定を受けて実質的に活動を開始した私たちがまず取り組んだことは、地域の方々の小径への思いを聞くことでした。30 人ほどに聞き取りをして通信にまとめ、100 枚くらいを手分けして周辺住民にお知らせしました。地域の方々への聞き取りの結果、小径は地域で愛される散歩道であることがわかりました。そこで、まずは自分たちが小径をしっかりと知るための植物調査をおこない、魅力を PR するための地域向け植物観察会を始めました。そして小径の会の活動方針を、（１）土のある環境を大切にする　（２）地域の原風景再生を目指す　（３）心安らいで歩ける散歩道として大事にする　としました。

３つの活動方針に従って、以下のような活動に取り組みました。

（１）「土の復権プロジェクト」など他団体のイベントに学び、左官を生業とする方々との連携・勉強会に参加し、土を見直すことの大切さを地域 PR することに努めました。

（２）小径に生えている植物を大切にすることで船橋在来の植物を守り、地域の人からかつての風景を聞き取り、再生していこうとしました。

（３）降った雨が浸み込み、生き物も暮らせ、四季の自然に触れて歩ける土の道は、人の足にも優しく、町の大切なインフラではないかという思いから、自転車を降りて歩いてもらえるように関係者と話し合いました。

2003 年の夏、当時の世田谷まちづくりセンター(現世田谷トラストまちづくり)の協力を得て、小径の今後を地域に問うアンケート調査を実施しました。小径の印象・使い方・舗装・自転車についての意識調査でしたが、100 を超える回答から得られたのは、土の散歩道としての当時の現状を良しとし、今後も変わってほしくないという地域の声でした。

地縁的な後ろ盾を持たない会の、これら活動に対する地域の反応は概して協力的でした。地域の他団体、複数個人にも活動を地域デビューさせるに当り協力をいただいています。多くの方から応援、物品の提供が寄せられ、地元作曲家の好意で「小径の歌」もでき、同年秋には、これに応えるかたちで地域の人々を招き小径に隣接する千歳丘高校の生徒による小径の歌のお披露目と会の謝辞表明の場、「小径の収穫祭」を実施し、その後も会の継続事業でした。

世田谷区からのサポートもあり、地域の町会・自治会委員で構成する身近なまちづくり推進協議会に地元町会委員として参加し、活動へのご理解をいただく形が作られました。活動開始後に枝道計画が区から地元に発表された際は、町会・まちづくり推進協議会・隣接する千歳丘高校・小学校と同 PTA・児童館・地域住民・世田谷区・世田谷まちづくりセンターなど 20 数名が小径を見学し、小径の今後について地域が話し合う場となりました。2004 年 6 月に区との間で管理協定を交わしました。活動の出だしから今日まで世田谷区の協力と支援があったことは言うまでもありません。

写真２　風景づくり活動の現在の小径入口部の様子（2014 年）

2004 年からの数年間は小径と小径周辺の変化の時でした。小径の隣接地に高層マンション建設が始まりました。小径と接するマンションの環境空地について小径との風景のつながりを意識しマンション住民が誇れるような環境を目指し開発事業者と協議を続けました。周辺の変化にも耐える土の道であるよう、ぬかるみを避けるための土舗装、ユニバーサルな観点から小径内の段差解消、自転車を降りるように促す啓発板設置など区の小径改修工事も進みました。改修工事は 2009 年春に完了しましたが、風景づくり条例に規定するアドバイザー制度により栗原国男氏(東京農大非常勤講師)の派遣を受け整備案を区、近隣の方とともにつくり、会による水たまり補修、整備案を前倒ししての植え込み地づくりなど自主工事を実施し、本工事では施工参加もしました。

一方、東京農大金子忠一先生他に講師を依頼して地域啓発のセミナー実施や、地域の一般参加を得て小径の絵本作り・写真講座とそれらの展示会も実施しました。小径の植物で染色や織り、葛は繊維にして織りあげ、その工程を絵本にまとめ地域に発表しました。「ここは川だった」、「ゆたかな時間・ゆたかな心」など毎回テーマを決めて、自然に出会える土の道の大切さと魅力を地域に発信していきました。小径には枝道がつながり、隣接地に 2 棟目の高層マンション建設など変化は続きました。

活動は、現場の手入作業中心の風景づくり、地域への宣伝と普及啓発・通信の発行、都会での自然との関わりを手しごとから再考する「小径工房」となっていきました。活動は地域の方々とのかけがえのない、つながりも育みました。手しごとの小径工房の参加者は世代を超えており、昔ばなし、町のかつての様子や暮らしなどを聞きながら手を動かすこともありました。メンバー数も増え、町会・学校・児童館・隣接する千歳丘高校などの地域団体との連携も広がりました。2006 年には小学校での授業サポートが定着しました。小径での活動について話し、子ども達に小径という身近な自然があり、その素晴らしさに気づいてもらい、身近な自然を残そうと活動する町の大人たちがいることを知ってもらいたいと思いました。2007 年には、小径のお菓子があったら素敵ではないかと駅前の千歳虎屋さんにお願いし、お菓子「こみち」ができました。四季ごとに変わる包装紙にはかつて小川だった小径の由来と地域風景資産であることが記されています。2011 年には「世田谷みやげ」となり小学校の 50 周年記念行事の祝い菓子はこの「こみち」でした。

写真３　地元お菓子屋千歳虎屋の「こみち」

私たちの関心も小径を核に地域全体へと広がっていきました。「水辺」や「町並み」、地域らしい「みどり」の実現を念頭に、駅前広場へ「かつての船橋風景を模した植え込み」

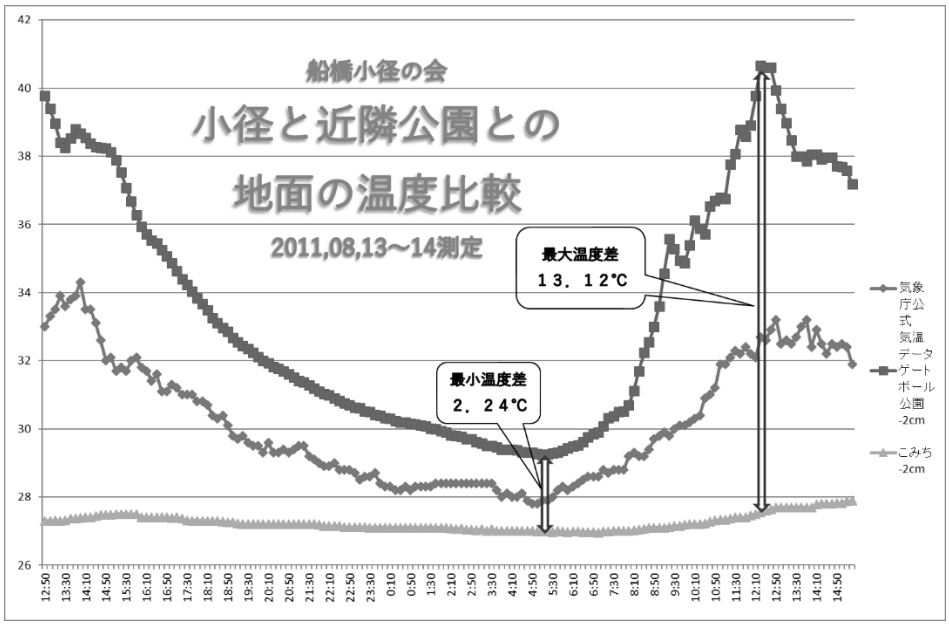
を提案し、「地域の暗渠を歩き水源探し」、「湧水のあるお宅や町並み散歩」などを重ねていきました。

さらに 2011 年、土の道の良さを知ろうと考え、栗原氏より紹介を受け東京農業大学の協力で、夏季と冬季における小径の気温・湿度の環境を評価しました。同時に隣接する千歳丘高校の生徒による温度調査もスタートしました。また、風景づくりを進めるための資料として小径では植物はじめ生きもの調査をおこない、ボランティア協会から派遣される「夏ボラ」の中高生、近隣の小中学生なども参加し継続してきました。

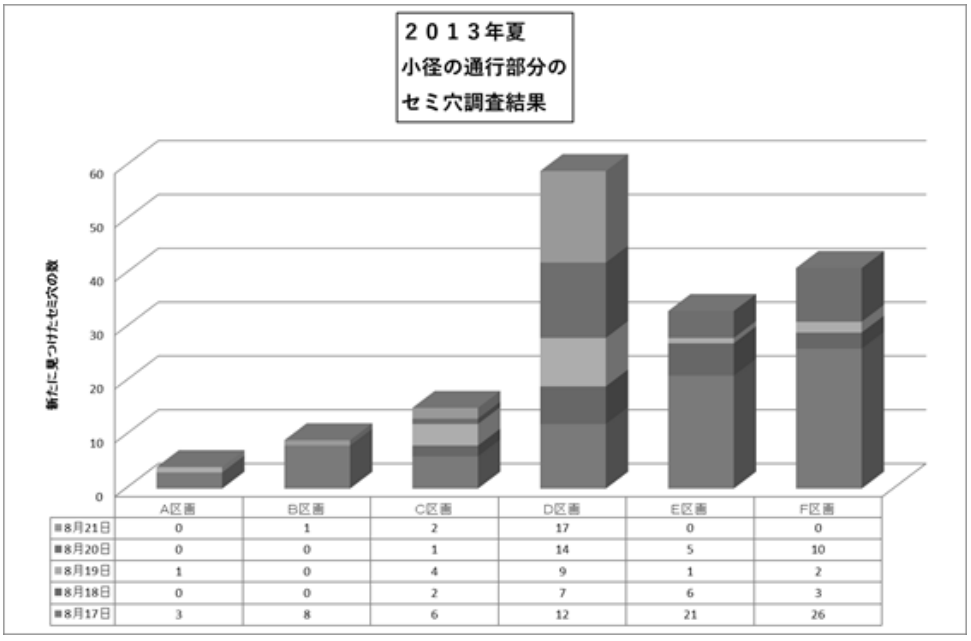
2011 年の温度調査により小径は日中、夜間を通して、温度が約 27-28℃と一定であることがわかりました。これに対して、近隣の公園では、日夜の温度差 11.4℃もありました。小径と近隣公園との地面の温度を比較すると、最大温度差は日中 12 時 30 分頃の 13.12℃の差があり、最小温度差は早朝 5 時頃の 2.24℃で、日中夜間ともに、小径の温度が低温であることがわかりました。

また 2013 年のセミ穴調査では、D地区が最も多く次いでF地区、E地区となり、A・B・C地区は極端に少ない結果でした。植物調査と照らし合わせてみると、D・E・F地区ともに日当たりがよく、D地区には落葉広葉樹（ソメイヨシノ 6 本、ニセアカシア 7 本）が全地区内で最も多く、F地区にはケヤキ、ウメ、クワ、ニシキギ、グミの落葉樹、E地区にはソロ 3 本の落葉樹がありました。一方、A・B・C地区はサワラの常緑針葉樹が多く、樹木北側・西側のため、十分な日照に恵まれず、C地区の一部にエノキ、アオギリ 3 本の落葉樹がありました。これらの結果から、日照や樹木の違いによってセミの生息環境に違いが現われるものの、5 日間（8 月 17～21 日）で 161 箇所ものゼミ穴を確認でき、生き物にとっても貴重な土の環境であることが、わかりました。

写真４　小径の気温調査・セミ穴調査の実施（2011 年～）



図表４　小径内外の気温調査



	A区画	B区画	C区画	D区画	E区画	F区画
8月21日	0	1	2	17	0	0
8月20日	0	0	1	14	5	10
8月19日	1	0	4	9	1	2
8月18日	0	0	2	7	6	3
8月17日	3	8	6	12	21	26

図表５　小径内のセミ穴調査

３．小径の地域コミュニティへの共感・連携：持続的な管理による水辺の風景再生へ

小径そばの宅地が公園用地として区に寄贈され、2008 年、公園づくりの住民ワークショップが区主催で開催され船橋小径の会も参加しました。会が目指したのは小径につながる風景と環境のひろがりです。水辺の復活を期待し旧宅の井戸を活かした池・旧宅の面影を留める門と大谷石土台の存続を提案。周辺の歴史と地誌をまとめた「ふなばし歴史散歩」看板の設置も提案しました。

公園が完成し 2009 年に管理協定を結びました。この池のある公園が活動を展開させました。2011 年、池の生きもの調査の結果、平家蛍が棲めるかもしれないとわかり、水辺と蛍復活への思いが高まりました。蛍復活は、風景と環境再生実現のわかりやすい指標となりました。

以降小山田緑地、寺家ふるさと村、箱根の湿生花園などの見学、岡本民家園など区内への勉強会、蛍研究の先生、世田谷区のホタル飼育経験職員を招いての勉強会を重ね、蛍の生態、生息の環境条件などの勉強成果とともに地域へ発表しました。蛍の棲む環境の再生はイコール水辺の再生を意味します。池の課題であった水質劣化改善のため、閉鎖エリアに新井戸設置の検討が始まり、区との相談も重ねていきました。2014 年には空堀の簡単なせせらぎを試作しました。水道からの通水でしたが池に水が届くと一緒に作業した子ども達から歓声があがりました。以降、この水辺再生事業は「子どもぶんか村」ボランティアくらぶ中心に地域の子ども達と進めました。新井戸から池への給水はソーラーポンプとタイマーで自動給水する案にしぼられていきました。同年、都市緑化機構より緑の都市賞奨励賞を受賞し、記念講演会を開くなど順調に活動は進んでいましたが、2016 年初夏、池に洗剤が混入し生きもののほとんどが死滅。新水源確保の必要を強く認識しました。そして 2017 年 2 月、区の協力のもと船橋小学校オヤジの会、前述ボランティアくらぶ、地域の子どもなど朝の集合時で総勢 60 人を超える人々が集まり全員の作業協力で井戸掘りが実現。その後半年をかけて前述オヤジの会、地域住民の協力でソーラーシステムの導入を果たしました。最終作業と通水時はボランティアくらぶの子ども達も参加し、2018 年の初夏には池に蛍が舞いました。ここまで前述オヤジの会延べ 30 余名がともに作業し、2018 年夏は同会の 10 余名が通常樹木管理作業で協力しています。水質改善、生きもの種類と個体数に変化があったかの検証などすべてはこれからです。今言えることは、これが世田谷の他のエリアにとっても水辺再生モデルとなり得る試みだということです。

折しも隣接高校の建て替えが進行中。小径に沿った外構のつくりを東京都と協議中です。既存樹木の存続に関しても先々までのことを考え、大きな変化も受け入れていかなければならないでしょう。環境評価データを活かし、これまでの地域景観を引き継いでより良い小径風景と環境が育めるよう、今後の協議に臨みたいと思います。

図表６　船橋小径の会の活動と地域との連携

年	船橋小径の会　活動	地域との連携・参加協働　活動	
2002	小径が地域風景資産となる		
2003	船橋小径の会発足 小径印象ヒアリング結果を通信で発表 区と会含む地域との話し合い 小径アンケート実施	高校	千歳丘高校生と合同清掃植物観察会第一回実施 高校文化祭初・地域イベント参加 小径の収穫祭：小径の歌を高校生発表
2004	開発事業者との協議開始 区と管理協定締結 活動報告会実施：区・町会・隣接高校・小学校・PTA・児童館を招待 水たまり補修、小径整備計画作り着手	児童館	児童館イベント初参加 賛助会員募集開始
		町会	町会新お祭りに初参加
		高校	千歳丘高校生の初作業協力
2005	整備案の前倒しによる自主整備	地域	地域対象セミナー３回主催
2006	区の整備工事開始・工事に施工参加	小学校	小学校授業初サポート・小径PR展示
2008	能勢公園ワークショップで池など提案		
2009	能勢公園開園・区と管理協定締結		
2010	発表会「ゆたかな心・ゆたかな時間」	小学校	小学生の初小径作業体験
2011	能勢公園池の生きもの調査 /蛍の餌貝発見 農大協力による温度調査開始 専門家の来訪を受け蛍勉強会	大学 小学生 中高校	農大生活動参加 ぶんか村ボランティアくらぶ初参加 夏ボラ中高生初受け入れ
2012	植物全調査 開発事業者との協議 岡本民家園へ蛍飼育勉強		
2013	小径と能勢公園の生きもの調査２回 3 か所へ蛍見学 能勢公園池のかいぼり初回	中学生	中学生活動を開始～2016 年度
2014	せせらぎ試作 能勢公園が地域風景資産となる 「緑の都市賞」奨励賞受賞		
2016	能勢公園池に洗剤混入 蛍幼虫飼育開始		
2017	井戸掘り ソーラーシステム導入		
2018	能勢公園で放流蛍幼虫の初羽化		

４．おわりに

2015 年 9 月の国連サミットで採択された「持続可能な開発目標（SDGs)」は、持続可能な世界を実現するための 17 のゴール・169 のターゲットから構成され、その 17 ゴールの１つの目標 11 のねらいは、コミュニティの絆と個人の安全を強化しつつ、イノベーションや雇用を刺激する形で、都市その他の人間居住地の再生と計画を図ることにあるとされています。

“Think Globally Act Locally”といわれて久しいですが、こうした持続可能な社会に向けたグローバルな動き、生物多様性、防災から減災へ、グリーンインフラ、地域の郷土風景の再生などへの価値意識の高まりを感じます。地域コミュニティの絆を深めながら多くの方々に助けられ、ともに活動する「船橋小径の会」による風景づくりが、いつの日か、現代の人間社会だけでなく、歴史文化、植物や生き物にとっても“理想の世田谷風景像”のひとつに成長できたらうれしいと思います。

身近な自然、日々の暮らしの傍らになくてはならない自然の営みの減少にこそ、船橋小径の会の活動の出発点があります。これまで様々な取材にも応じてきましたが、FM 世田谷があいにくの雨のなか、小径から中継で生放送してくれた時、アナウンサーの女性が「みなさん、土の小径では今日、ちゃんと水溜まりができています」と一言、嬉しい言葉でした。水辺再生への一歩が地域の大きなうねりとなって、いつかこの船橋にも住民に愛され大切に守られ後世に手渡される水辺が、取り戻される日が来ることを信じています。

［参考文献］

１）世田谷区企画部都市デザイン室（1986）：世田谷風景図集

２）西川美枝子（2013）：まちのなかのささやかな自然をめぐって 日本建築学会編　景観再考 p143-152

３）入江彰昭（2015）：都市のリジェネレーションと緑のストック 日本都市計画学会　都市計画 314 p68-73